

# 古代エジプトの宗教人間学考

— バー を 例 に し て —

吹 田 浩

## I 序

古代エジプト人は、宗教的な意味あいでは人間をどのようなものと見ていたのであろうか。この興味深い宗教人間学の問いについては、彼らがわれわれ日本人からは時代・地域ともに遠くはなれていたため、簡単には答えられず、またわれわれも、誤った先入主から恣意的な解釈を出すことがしばしばであった。しかし、その分、今日でも人間理解の研究にとって興味深い例となっているものである。

さて我が国では、この分野の研究論文が欠けているため、本論では、包括的な見地を与え、加えて、筆者が思うところの問題点を指摘したいと思う。以下、Ⅱでは、「魂」についての宗教学、エジプト学での定説を提示し、Ⅲでは、その記述のための方法を例示し、Ⅳでは特に、人格化における問題点について触れてみる。

## Ⅱ 「魂」とは

まず、われわれは一般に、宗教現象に対して、どのような立場を取ればよいであろうか。宇宙には「何か」があり、それは、「非日常的なもの、殊に力あるもの、希有なもの、異常に大きなもの」であって、これをわれわれが体験することが、宗教であると考えることが出来よう。そして、これを前提として、宗教そのものを理解していく場合、まず、宗教にはそれ「固有の領域」があるとし、「およそ人間的なものの中でわれわれにとってまったく異質なものは存在しない」ゆえに、「理解可能な関係」において「追感し、感情移入し、それに精通しようと試みる」宗教現象学の立場が、我々の基本的な立場となろう。事実、多くのエジプト学者は、宗教現象学者でもあり、今日の古代エジプト宗教研究に多大な影響を与えている H. Frankfort, *Kingship and the Gods : A Study of Ancient Near Eastern Religion as the Integration of Society and Nature* (Chicago, 1948) や、E. Hornung, *Der Eine und die Vielen : Ägyptische Gottesvorstellungen* (Darmstadt, 1973) もこの立場である。

当然、この立場は、エジプトの宗教人間学の文献でも前提とされている。  
B. George (後掲書, p.2) と G. Englund (後掲書, p.14f.) は以下のように述べている。

「それら(筆者注——エジプトの陳述)はもはや無意味な思弁としてではなく、すべての宗教的な基本状況と同じく当時の人間の体験の結果として現れているのであり、その当時の人間の体験は——たしかに異なった祭服を着てはいるが——原理的には今日でも可能なのである。」

「接近は困難ではあるが、それでもこれらの諸観念は、宗教体験の分野が原則として同じはずなので、現代の西洋思想にとって理解しがたいはずはない。」

さて、宗教現象学は、B. George (後掲書, p.18) に拠れば、「魂」に2つの定義を与えている。<sup>①</sup> (a)「力強く、活動的なもの (das Mächtig-Wirkungsvolle)」, (b)「人間の一部ではなく、その聖性における完全なる人間」。これらもエジプト学では受け入れられていると考える。

古代エジプトの宗教人間学についてのスタンダードなモノグラフとしては、以下が挙げられよう。

バー : Louis V. Žabkar, *A Study of the Ba Concept in Ancient Egyptian texts* (Studies in Ancient Oriental Civilization 34; Chicago, 1968).

カー : Ursula Schweitzer, *Das Wesen des Ka im Diesseits und Jenseits der Alten Ägypter* (Ägyptologische Forschungen 19 ; Glückstadt, 1956).

アク : Gertie Englund, *Akh : Une notion religieuse dans l'Égypte pharaonique* (Acta Universitatis Upsaliensis : Boreas : Uppsala Studies in Ancient Mediterranean and Near Eastern Civilizations 11 ; Uppsala, 1978).

陰 : Beante George, *Zu den Altägyptischen Vorstellungen vom Schatten als Seele* (Habelts Dissertationsdrucke, Reihe klassische Philologie 7 ; Bonn, 1970).

(a)「力」については、それぞれニュアンスの差を持ちながらも、研究者の間に異論はない。また、(b)「完全な人間」については、一元論であり、やはり今日では異論はないと言える。<sup>②</sup>人間は肉体と魂から成っており、しかも肉体は魂の監獄で云々という二元論的な考えは、オルフェウス—プラトン—グノーシス—スコラ哲学流<sup>③</sup>の考え、あるいはもっと素朴な形でわれわれ日本人にも染み込んでいるが、そうした二元論的な考えは、古代エジプト人には縁がなかったことは、すでに定説となっている。<sup>④</sup>

エジプト学の文献<sup>⑤</sup>では、Žabkar は、バーを「力の現れ」、および「力の現れ

たもの」とし、G. Englund はアクを「個人」、および「状態や発散する力」<sup>⑧</sup>とし、G. George は陰を「特別な面のもとでの作用する力、および完全な人間」とするとしている。

ただ U. Schweitzer は、カーを「力の要素 (Machtfactor)」とするが、定義として(b)「完全な人間」についての言及はない。彼のアプローチは他と異なり、力点がカーの発展を宗教外の要素、環境、時代像、宗教的見地、そして当該の世界観に帰することにかかっている還元主義である。

カーについて、現象学的見地に立つ主要な論考がないとはいえ、やはり、(a)「力」と(b)「完全な人間」が当てはまると考えられよう。例えば、A. H. Gardiner は、「われわれが書かれた記録を持っている最古の時代から、エジプト人は人間の個体 (human individuality) が種々の形式で現れることが出来ると信じていた。そしてそれは、漠然と述べられているようなその性質の『部分』というよりは、その存在の変化する様式 (shifting modes of its being) である。しばしば具象化された鳥のような魂 (パイ) はこれらの一つであり、カーつまり生き写しはいま一つのものであり、陰は三つ目、遺体は五つ目、その他とあるのである」と述べており、<sup>⑨</sup>カーを(b)「聖性における完全な人間」と捉えることについても、今日問題はないと考える。

以上、詳細な点ではかなり見解に相違が現れるとはいえ、根本においては諸家の見解は、今日、一致していると言えると考える。

⑩ また、結果として、今日エジプト学では、それらの諸概念に適切な訳語がないために、誤解を招きやすい「魂」とか「霊」とかの用語を避けようとする<sup>⑪</sup>ことでも一致している。

### III 記述の方法

⑫ さて、G. Englund も言うように、<sup>⑬</sup>包括的な用語での定義や記述はそれらのあいまいな意味を説明することが出来ない。では、いかな方法がそれらの意味を明らかにしうるであろうか。先に見たように、すでにスタンダードな研究書が出ており、主要な点については述べられている。筆者は、今後、より精密な記述が必要になってくると考え、また、基準の曖昧さに由来する論点の混乱を避けるためにも、以下の五次元の見地からの記述を考えてみたい。

- (1) 時間 (古王国・中王国・新王国など)
- (2) 層 (Royal or non-royal など)
- (3) コンテキスト
- (4) 機能
- (5) 概念の分化項目

バーを例にしてみよう。バー概念が時代とともに変化していったことは説明を要しない。ファラオが特権を持っていたことから、テキスト所有者の層、あるいはもっと言えばテキストによっても変化があり、区別される。これを基本に、バーが出現するコンテキストと機能を記述する必要があるだろう。

さらに、コンテキストと機能には、いくつかのレベルが考えられる。コンテキストでは、語レベル（バーの家、チャペル〔バーが建てた物〕など）、文章レベル（各センテンス）、類型レベル（昇天、人手、処罰など）、機能では、文章レベル、（各センテンス）類型レベル（力の顕示、能力付与など）などが考えられよう。

また、バーは、その現れの性質上、大きく3種に分けられると筆者は考えている。これを概念の分化項目とする。

- (a) 非人格的な力（名詞・動詞）<sup>⑭</sup>
- (b) 非人格的な力が現れたもの（名詞）
- (c) 人格化した力（名詞）

例を挙げてみよう。(a)は、「霊質 (Seelenstoff)」<sup>⑮</sup>といわれるもので、古代エジプトではピラミッド・テキスト以後に見られる。名詞と動詞の例を一例ずつ出してみる。

『見ることはなんと美しきことか、眺めることはなんと安らぐことか、』と彼らはいふ。(つまり) 神々は言う。『この神が天へ行き、ウニス(王)が天へ行くことを。(その時) 彼のバーたちは彼のうえに、彼のシャト(恐れ)は彼の回りに、彼のヘカウ(魔力)は彼の足元にあるのだ。』

(Pyr. 476a-77b W)

「生きよ、汝が毎日歩き回らんがために。『レーが出ていく地平線』という汝の名でアク的なれ。ワシュ的なれ。セペド的なれ。永遠に。永久に。」

(Pyr. 621a-c T)

前例では、故王が天へ昇るとき、彼の周囲にはバーを始めとする諸力が現れているのである。シャト・ヘカウ・アク・ワシュ・セペド・セケムは、いずれも力の概念である。

(b)もやはり「霊質」<sup>⑯</sup>で、(a)の非人格的な力を持つものである。その際、無条件にその力を持つ者と、その力を持つ神々から移された結果持つものがある。<sup>⑰</sup>また、後者の「もの」は、「者」と「物」を問わない。

「私(故ペピ王)は、バー、汝らのあいだを通り行く者である。神々よ。」

(Pyr. 1205a P)

「オー、力強きバー、ニンスウにいる者、カウ(力)を与える者、悪人を

追い払う者、永遠の道を示す者よ、——彼はレー自身だ<sup>13)</sup>——私を救わんことを／(以下略)」(CT IV, 319a-e)

以上は、無条件に力を持つ者の例である。以下は、与えられた結果持つもので、神の力が人間(死者)に現れたもの、他の神に現れたもの、神聖な動物に現れたもの、非生命体に現れたものの例である。<sup>14)</sup>

「私(故人、私人)はシュー(神)、自ら生まれし神のバーである。」  
(CT I, 314-5b)

オシリス神は「洞窟の主(アヌビス神)のバー」である。(Louvre stela C286, line 2)<sup>15)</sup>

メンデス(地名)の羊はオリシスのバーである；ワニたちはスコス神たちのバーである。すべての神のバーはヘビのなかにいる。(See Maystre in BIFAO XL 103)<sup>16)</sup>

月はオシリスのバーである。(Junker, *Götterdekret*, p. 87)<sup>17)</sup>

(c)「人格化した力」に関して、人格化とは、「意志と形態」を与えることであり、魂に関しては「独自の形態」を取り、その結果、「自由でもあり、肉体を離れることが出来る」ようになることであると考えたい。<sup>18)</sup>

古代エジプトでは、新王国時代から以後に見られる。ピクトリアルな面から見れば、人間の髭と顔を持った鳥であり、宗教文書にしばしば現れる。また例えば、アニの死者の書第125章の死者の裁判では、彼の心臓が天秤で計られている際、それを見守って、故人とは独立して描かれている。付随するテキストで、トト神が述べる言葉もこれを裏付ける：「我はオシリス(アニ)の心臓を調べた。彼のバーが彼のために証人としていた間」。<sup>19)</sup>

以上、それぞれについて見てきたが、すでに、主要な点についてはそれぞれモノグラフが出ており、今後は一定した基準のもとでの厳密な記述が必要と考えている。

#### IV 人格化の問題：類似概念間の関係

古代エジプトには、いわゆる靈魂が数多くある：バー・アク・カー・陰・セケム・ワシュ・セベド・サフなど。それらは、それぞれ存在理由を持って、独自の意味内容をもっているはずだが、今日、鋭く対立させて意味を限定させることは難しい。ただ言えることは、古代エジプト人が極めて宗教性に高く、種々の力を体験していたということである。

ただ、これは以下の疑問を起こさせる：個々の力が独立して行動する時、それぞれの関係はいかなるものであるのか；どのような場面をイメージしたらよいか。<sup>20)</sup>

この点について、先に筆者が提示したような記述の基準がないため、出されている見解は混乱しているように思われる。ただ、以下のような考えが通常なされていると思われる：「それらは、それぞれが、完全に肉体的な個体と考えられた」のであり、「古代エジプト人は、死後、様々な形態で (in a multiplicity of forms) 生きると考えられたが、これらの形態のそれぞれは完全な彼自身であった」<sup>③</sup>。しかし実はここに、筆者は不確定なものがあると感じているのである。

ここで、*Žabkar* のいうそれぞれ独立した完全に肉体的な個体について彼の考えを追うことが必要であると思う。

*Žabkar* は、古王国崩壊後、来世での心配事がより特殊になり、中王国をとおしてバーが人格化したと考える。ピラミッド・テキストにおける「故王の力の現れ」〔Ⅲ(a)〕と「その力が現れた状態にある故王」〔Ⅲ(b)〕から、「バーは、それが属し、それが種々な機能をために行う個人の人格化された agent を意味するようになった」<sup>④</sup>のであり、その際の形態は、故人の「外的、および内的に正確な写し (likeness)、人格化された alter ego」であるといわれる。

コフィン・テキスト以後においては、「故人が所有するバーが完全に、かつ独立して機能する個人と考えられている」<sup>⑤</sup>ように見える箇所が現れる。そして、その「バーが取る著しい役割は性行為の代理人としてであった」<sup>⑥</sup>といわれる。

「私は自分の回りに私のバーをつくり出した。私が知っていることをそれ (私のバー) に知らしめるために。私の遺体のために、私のバーは燃えないし、私のバーはオリシスのボディガードに阻まれない。私は性交し、私のバーは性交する。私のバーが炎の島に住む人々と性交する時 (あるいは、  
「時はいつでも」) 私はいつでも女神たちと性交する。」(CT I, Spell 75, 360 c-366b)<sup>⑦</sup>

なぜ筆者が *Žabkar* の見解に不確かなものを感じるのか。一つには、ピクトリアルな証拠がないことであり、もう一つは以下のテキストである。

「私のバーと陰を取れ。あちらの男がそれを見んがために。彼がいるどこでも、彼の前に立て。……私のこのバーとこの陰を取れ。あちらの男がそれを見んがために。彼がいるどこでも、彼の前に〔立て〕。(CT II, Spell 104, 111c-k B1C ; G2C もほぼ同じで、S2Cは前例が破損している)

「道は私のバーとアクのために、私の魔力と陰のために開かれる。それはその厨子の中のレーの所へ行く。それは、大いなる神をその真の姿で見る。それは、オシリスの言葉を、その顔が秘密の者たち、オシリスの肉片

の管理者に繰り返す。……行け。行け。私のバーとアク、魔力と陰よ。開けよ、汝のために、天の窓を開け広げよ、汝のために、大いなる家を。出てゆき、下れ。汝が汝の足に対して力を持つからだ。汝はすべてのバーを監視し、男でも女でも死者などの陰を拘束するオシリスの肉片の管理者によって拘束されない。行け。行け。私のバーとアク、魔力と陰よ。汝が汝の足に対して力を持つからだ。汝が「レー」の真理をもたらさんがために。」(CT VI, Spell 491, 69a-71j B3L<sup>a</sup>；加えて、前半はB3L<sup>b</sup>, B9C, B1Y (破損), B4C (読みづらい), T3Be, 後半はB3L<sup>b</sup>にもある)

個々独立して完全な故人であるはずの個体が、羅列されたうえに、下線部に見られるように、前方照応の代名詞では、単数形が使われているのである。エジプト人は、ここで、複数の死者の「魂」を見たのではなく、ただ一者のみを頭に思い浮かべていたようにあつかわれているのである。例は、以下にも見られる：Spell 488 (B9C, B1Y), Spell 492 (B3L<sup>a</sup>, B3L<sup>b</sup>, B9C, B1Y), Spell 499 (B3L, B3Bo, B4C, T3Be), Spell 500 (B3L)。

書記の誤記は考えられない。テキストに数があるうえ、呪文内や写本間において、単数と複数の混乱がなく、意図的な書き方であると思われる。

確かに、自分のバーなどを「それ」「汝」などで指しているところから、故人から独立していると思われる。その意味で人格化ともいえる。しかし、人格化された姿はどの様なものであったのかは分からない。そして、バー・アク・魔力・陰を合わせて一者であるゆえに新王国時代の人格化と異なっていたことは疑いない。Žabkar のいう alter ego, 外的および内的に正確な写し(likeness)のようなバーは、ピクチャーとしてはエジプト全史に現れないことも考慮せねばならない。

これについては、別の説明を要することになると思われる。人格化〔Ⅲ(c)〕でないとするれば、考えられるのは、力の現れた者〔Ⅲ(b)〕という事になろう。「私のバー」で「私のバー(力)が現れた者」を表していることになる。故人のバーなど複数の力の状態にあることを強調していることになる<sup>⑤</sup>。Žabkar のいう人格化された alter ego とは、筆者のⅢ(b)に当たり、古王国崩壊後、私人がバーを所有するようになった結果、その故人の力の移された対象に、誤って視点を置いたものとする。

問題は、この本来故人とは別の存在者であり、力を移されたゆえに故人として扱われる者が誰であるのかという点にある。理論上は誰でもなれるが、文脈によって特定の結びつきがあったはずである。この点は今後の課題としたい。

さらに、故人自身であった可能性もある。「私のバーが現れた者」は、つまり、「私」でもありうる。先の性行為の例 (Spell 75) では、故人とバーの同じ

性行為の繰り返しは、故人の力の状態を顯示するものとも考えることもできる。<sup>③</sup>

問題はさらに複雑である。類似概念が個々独立しているような例もある。

「汝が私のバーと陰をアク的にせんことを。彼らがレーをそのもたらすものに見んがために。」(CT V, Spell 413, 240d-e M5C ; S2C, B1Y, B2Bo, B4Bo, B4Bo, B1Bo, S10C [破損])

同じ呪文にもう一度、例が出てくる。これも、写本の数から必ずしも誤記とは思えない。異なった伝承と共存している。

また、以下の例は、まちがいなく人格化していたはずの新王国時代のものであるが、こちらは単数名詞が使われている。古い伝統は捨てられていない。

「道を開け。私のバーのために、(私の陰のために)、[私の] アクのために。それが、(その) 厨子の中の大いなる神をバーを数える日に見、オリシスの言葉を座の隠された者たち、オリシスの肉片の管理者に繰り返さんがために。」(BD Spell 92 bS3)<sup>④</sup>

以上の2例は、問題の複雑さを十分思わせる。いずれにせよ、中王国における人格化の問題が、バー概念での解決を待つ最大の問題であることは指摘できよう。その際、バーをいかに意味区分するか、そして誰がバーなのか極めて複雑なのである。III(b)に、私人の力が他に移ることも考える必要もある。いずれにせよ、以下の Žabkar の言葉が、重くのしかかってくるのである。

Nothing was ever discarded, nothing systematized.<sup>⑤</sup>

最後に、この問題が、実は、神観念の問題につながるエジプト宗教に深く根づいた問題であることを指摘しておきたい。

古代エジプト宗教は多神教であった、ではわれわれは満足できない。すでに前世紀より、エジプト宗教を一神教とする見解があり、これを軸に今日まで議論がなされ続けてきている<sup>⑥</sup>。多の中に一を見る、エジプト的な傾向が確かにあるのである。例えば、Neb-wenenef の石碑は、レー・ハラクテとオシリスの二神に捧げられたものだが、テキストは、両神を融合して、一つである。神の人格もやはり問題なのである。

## V 結

古代エジプトの宗教を理解しようとするなら、宗教現象に固有の価値を認める宗教現象学が、われわれの基本的な立場となる。宗教人間学の分野では、今日、何かと誤解の多い「魂」、「霊」のごとき訳は避けられる傾向がある。人間学の一般的概念としては、(a)「力強く、活動的なもの (das Mächtig-Wirkungsvol-



lle)」、(b)「人間の一部分ではなく、その聖性における完全なる人間」〔一元論〕であり、この点に異論は出されていない。個々のより正確な定義は、(1)時間、(2)層、(3)コンテキスト、(4)機能、(5)概念の分化項目の記述の中でなされるべきであり、主要な点はすでに種々指摘されているが、さらにより正確な基準のもとでのより正確な記述が要求されていると考える。また、バーを例にすれば、その最大の問題点は中王国における人格化の問題である。筆者の考える人格化は、新王国時代には文字に加えてピクトリアルな画像もあるゆえに疑いえないが、中王国時代には、故人から独立しているように見える複数の人間学の諸概念が、まとめて単数代名詞によって指示され、さらにピクトリアルな画像の証拠のないこともあって、精査の必要があると考える。バー概念の柔軟さ、特に「非人格的な力が現れたもの」の多様性が問題を複雑にしていると思われる。また、この問題は、独り宗教人間学の問題にとどまらず、古代エジプト宗教史研究にとって長年の焦点、神観念の問題と密接に絡みついた問題であることも指摘されねばなるまい。

#### 注

- ① 筆者が知るのは、以下のみである。加藤一朗、「王のカァについて」『東西学術研究所論叢50 (関西大学東西学術研究所)』(1962), 1-11.
- ② G・ファン・デル・レーウ, 『宗教現象学入門』(田丸徳善・大竹みよ子訳, 東京大学出版会, 1979, pp. 12, 14f., 16, 24. なお本稿では、宗教現象の中で靈魂を扱うものを宗教人間学とよぶこととする。
- ③ Cf. 鎧淳, 「オランダの宗教学研究」『宗教研究』200号 (1969), 139-161.
- ④ G. van der Leeuw, *Phänomenologie der Religion* (Tübingen, 1956), pp. 311, 318.
- ⑤ バーについて, E. Otto のみが二元論を唱えている: E. Otto, "Die beiden Vogelgestaltigen Seelenvorstellungen der Ägypter," *ZÄS* 77 (1942), 82, 86. また, Hermann Kees が, "Teilbegriff" (*Totenglauben und Jenseitsvorstellungen der alten Ägypter*, p.40) から "Ganzenbegriff" つまり一元論 (*Der Götterglaube im alten Ägypter*, p. 46) へ見解を変えたのは知られる。
- ⑥ E.g. 「カーやアクとともに人間の精神的部分を構成する要素の一つ」『バー』, 『ナイルと王のエジプト』(新潮古代美術館3), 昭和55年, p. 131.
- ⑦ Žabkar, *A Study of the Ba Concept*, p. 112f.; *id.*, "Herodotus and the Egyptian Idea of Immortality," *JNES* 22 (1963), 60-62; George, *Zu den Altägyptischen Vorstellungen von Schatten*, p. 18. Cf. Englund, *Akh*, p. 18f.
- ⑧ Žabkar, *A Study of the the Ba Concept*, p. 161f.; Englund, *op. cit.*, p. 206; George, *op. cit.*, p. 120.
- ⑨ Cf. Schweitzer, *Das Wesen des Ka*, pp. 17-19.
- ⑩ A. H. Gardiner, *The Tomb of Amenemhet* (The Theban Tombs Series; London,

- 1915), p.99. 同様な見解は以下にも見られる : Žabkar, *op. cit.*, p. 8, 104f. ; Englund, *op. cit.*, p. 125. Cf. Kees. *Totenglauben*, p. 51.
- ⑪ J. Vandier, *La religion égyptienne* (2nd edition ; Paris, 1949), p.131 ; Hornung, *Der Eine und die Vielen*, p. 51.
- ⑫ Englund, *op. cit.*, p. 14. George (*op. cit.*, p. 18) は, 専門語として使用.
- ⑬ Englund, *op. cit.*, p. 16.
- ⑭ W. A. Ward (*The Four Egyptian Homographic Root B-3* [Studia Pohl : Series Maior 6 ; Rome, 1978], § 139-41) は, 非生命体について, 力そのものとそれが現れた容器を区別し, 後者をバーとしない。筆者は, 記述のための基準を重んじる。古代エジプト人はバーと呼んだのだから。
- ⑮ レーウ, 『宗教現象学入門』p. 178.
- ⑯ (a)の動詞が分詞として名詞化した可能性はある : “be Ba-full,” “be full on Ba”→ “one who is Ba-full,” “one who is full on Ba.” これは, エジプト語の「強い傾向 (A. H. Gardiner, *Egyptian Grammar*, § 509) である。しかし, もっと一般的なものかもしれない ; デマやワカンダのように (レーウ, 『宗教現象学入門』p. 27)。
- ⑰ 上に合わせるなら, “one who or which is full on the Ba of X” になろう。
- ⑱ これは, Spell 335の一節で, この部分は注釈である。T1C<sup>b</sup> と M1Nyにある。
- ⑲ 後3例はŽabkar (*op. cit.*, p. 11-15) の指摘するところである。
- ⑳ Quoted in Žabkar, *op. cit.*, p. 12.
- ㉑ Quoted in *ibid.*, p. 13.
- ㉒ Quoted in *ibid.*, p. 14.
- ㉓ Leeuw, *op. cit.*, p. 81.
- ㉔ レーウ, 『宗教現象学入門』p.179.
- ㉕ 18王朝から現れる。Cf. Žabkar, *op. cit.*, p. 144, n. 125.
- ㉖ Quoted in Žabkar, *op. cit.*, p. 146f.
- ㉗ 個々の力が独立していなければ, 故人の, それぞれの力が現れている諸面を表すと考えることができる。
- ㉘ Žabkar, *op. cit.*, p. 97. Cf. Gardiner, *The Tomb of Amenemhet*, p. 99f.
- ㉙ See Žabkar, *op. cit.*, p. 160f. 括弧内は直訳ではない。
- ㉚ *Ibid.*, p. 98.
- ㉛ *Ibid.*, p. 99.
- ㉜ *Ibid.*, p. 98.
- ㉝ *Ibid.*, p. 101.
- ㉞ Quoted in *ibid.*, p. 102.
- ㉟ 解釈を変えた :  $r. k \rightarrow Rc$ . See R. O. Faulkner, *The Ancient Egyptian Coffin Texts* Vol. 2, (Warminster, 1977), Spell 491, n. 1.
- ㊱ Englund (*op. cit.*, p. 124) がこの問題に言及している : 「個人のアスペクト, あるいは要素」。
- ㊲ この Spell は, バーの発展段階を並置していることで知られる。Cf. Žabkar, *op.*

*cit.*, p. 95.

- ③ 故人とバーのパラレルな関係は、力の顕示かもしれない。Cf. Pyr. 839a-b.
- ③ Quoted in Th. G. Allen, *The Book of the Dead or Going Forth by Day* (Studies in Ancient Oriental Civilization 37; Chicago, 1974). テキスト統一のため、訳を変えた語がある。
- ④ Žabkar, *op. cit.*, p. 108.
- ④ Cf. Hornung, *op. cit.*, pp. 1-19.
- ④ J. Zandee, *An Ancient Egyptian Crossword Puzzle* (Mededelingen ..... : Ex Oriente Lux 15; Leiden 1966).

(帝塚山学院高校講師 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX)

## 第72号 編集委員

小 山 仁 示 (教 授)	台 猛 (M 1)
藪 田 貫 (教 授)	宅 間 正 明 (M 1)
芝 井 敬 示 (助教授)	陳 波 (M 1)
石 川 泰 行 (M 2)	林 健 二 (M 1)
大 原 良 通 (M 1)	橋 本 卓 也 (M 1)
賀 納 章 雄 (M 1)	松 岡 伸太郎 (M 1)
木 曾 浩 (M 1)	松 塚 美 和 (M 1)
島 袋 都 子 (M 1)	入 江 幸 二 (3 回生)
高 木 桂 子 (M 1)	宗 我 まどか (2 回生)